



たね通信

2013. 3 No.2

発行 地域生活ケアセンター
小さなたね
【医療法人にのさかクリニック】



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（グラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

【編集後記】

今年も花粉の季節を迎えていきます。それに加えて、大気汚染の問題も大きな話題になっています。安心して深呼吸が出来ない環境の中で、これまで意識することもなく、当然あるべきものとしていた目に見えない存在の大きさを実感しています。失つてから分かる懲りを繰り返しているようです。

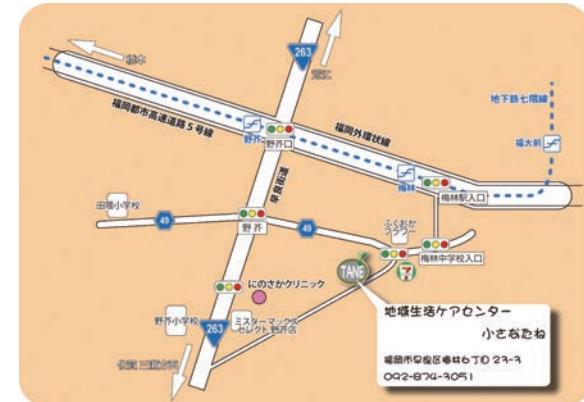
地域で生活するところ

私たちの日常で毎日繰り返される「生活」

(life) は、人が生きるための活動を意味しています。それは健康状態や環境により、そのスタイルや重点の置き方は異なってきます。医療的ケアが必要な方々にとっての生活は、当然「医療」にかかるウェイトが高く、医師や看護師のサポートがなければ安心した生活を送ることができません。しかし、それは欠けてはならないものですが、その人の生活の中心ではないはずです。「生活」（人間の生きるために必要な活動）は、「いのち」の活力であつて、命を守る医療から、命を育む環境（教育・労働・福祉・地域など）へ、本人が主体となり繋がつて広げていくのです。ですから、『生活の質』(Quality of Life)^(*) ひとりのトーマも、この活力の如何が問われていらじるところになります。

所長 水野 英尚

※アメリカの障害者の人権運動において、従来のリハビリテーション医療は障害者の人権を尊重せず専門家の権威・温情主義にとどまっているとの批判が強まり、リハビリ医学界がその目標を、それまでのADL（日常生活行為・身の周りの動作）の自立から、より広いQOL（生活の質）の向上へと転換した。



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail chisanatane@tune.ocn.jp
ブログ <http://chisanatane.blog.ocn.ne.jp/blog/>





たねすけじゅーる

日	月	火	水	木	金	土
					1 	2
3 休	4	5	6 	7	8 	9
10 休	11	12	13 	14 	15 	16
17 休	18 	19	20 春分の日	21	22 	23
24 休	25 	26	27 	28	29 	30
31 休						

たね食堂（毎週 水・金）

絵本の読み聞かせ（毎週 月・水・金）

福岡医療短期大学ヘルパー2級実習生受け入れ



地域生活ケアセンター小さなたねで、日中一時支援や短期入所などを利用して日々過ごす人たちの大部分は、自分で手足を動かしたり、言葉を話したり、口から食べることの困難な方々です。でも私たちは、この方たちが持っている豊かな感性や観察力が、内面に秘められていたことを知っています。それを形として表現できないものかと常々考えてきました。

その出発点として、この人たちは「何もできない人」ではなく、様々な可能性を秘めた存在であって、こちらの関わりによって引き出すことができるし、見出すことができるといった、私たちの側に「何ができる」かを問い合わせながらのチャレンジです。

■裂き織り

着古した着物やネクタイなどを裂き、横糸にして織り込んでいく「裂き織り」という技法があり、近所に住んでいる方が、それを自宅でしているところなどで、見学をかね相談に行きました。これまでの経緯を説明し協力

をお願いすると、「私はできる」と快く指導を引き受けました。

早速、卓上の簡易織り機を手に入れて準備を進めていましたら、「使わない織り機があるので、よかつたら使って下さい」と、立派な織り機を無償でくださる方が出てきました。そのようにして、二機の織り機に縦糸が張られ、まずスタッフが基礎的なやり方を覚えていたところですが、目指すは一人一人の個性を生かして、縦糸と横糸を織り合わせる「共同作業」で一枚の布を織り上げていくことです。さらに、それをアクセントとしたカバンやストラップなどに仕上げていく計画が膨らんでいます。



何ができる？

「相談支援」について

障がいを持つお子さんの保護者（主に母親）は、その子の障がいの特性からケアの仕方、医療や福祉制度の把握と各事業所との連絡調整など、様々な専門機関とのやり取りが必要となります。

それに通常の予育てが加わるのですから、一人で何役もこなしていかなければ、日常生活を営むことが困難となります。

近年では、居宅介護や訪問看護といった事業所が増えて、ほとんどの方が何らかの在宅支援を利用していると思われます。事業者も、より専門性の高いサービスが提供できるよ

うスキルアップに努めているようですが、しかし、自事業所での取り組みはあっても、他事業所との連携や、他職種間の情報の共有や合同学習会、支援会議などは行われていないのが現状です。そこで、制度として注目したいのが「相談支援業務」です。厚労省もこの業務の拡充を図っています。

これまで福岡市では、市の委託事業として、各区に一事業所程度の割合で「支援センター」が設置され、支援員が業務を担ってきたのですが、その需要の多さから、少数の支援員では十分に対応しきれていませんでした。そこで国は、相談支援として個別支援計画や事業所間の調整などの業務に給付を付け、相談支援事業を強化しようとしています。



写真を撮る

やうに、活動の一つとして「写真を撮る」といったことを考えていました。単に私たちがカメラを向けて被写体を撮ることではなく、「重い障がいのある方の目線で撮る」ということです。

寝ている姿勢の方の場合はその姿勢でシャッターを切る。車椅子やバギーに座っている場合も、その目線に合わせてシャッターを切る。そうして撮られた写真を見てみると、これまで自分がしか物を見ていなかつたことに気付かされます。「ああ、こんな斜めの天井しか見えていなかつたのか」とか「人の顔も歪んで見えるな」など、彼（女）たちの側の視点が見えてきます。しかし、私たちの考えが入って「こんな歪んだ写真」と、つい構図を変えて歪みを直したくなるのですが、斜めは斜めのままで撮るので。こうして、一人一人の視線の方向に何が見え、どう見えているのかを撮っています。やがて一



その目線の先に何が見える？

写真を撮る

やうに、活動の一つとして「写真を撮る」といったことを考えていました。単に私たちがカメラを向けて被写体を撮ることではなく、「重い障がいのある方の目線で撮る」ということです。

寝ている姿勢の方の場合はその姿勢でシャッターを切る。車椅子やバギーに座っている場合も、その目線に合わせてシャッターを切る。そうして撮られた写真を見てみると、これまで自分がしか物を見ていなかつたことに気付かされます。「ああ、こんな斜めの天井しか見えていなかつたのか」とか「人の顔も歪んで見えるな」など、彼（女）たちの側の視点が見えてきます。し

かし、私たちの考えが入って「こんな歪んだ写真」と、つい構図を変えて歪みを直したくなるのですが、斜めは斜めのままで撮るので。こうして、一人一人の視線の方向に何が見え、どう見えているのかを撮っています。やがて一

してパネル展示ができるのかとも考えています。
寡黙で言葉を発しない彼（女）たちの世界、私たちには見えていないことも、もしかしたら見えているのかもしれません。そんなことを考えながら、一緒にファインダーを覗き、シャッターを切る。そのような些細な小さな取り組みですが、私たちに「何ができるのかを考えながら、色々とチャレンジして行きたいと思います。

いつか思いが繋がり、共に苦しみ、共に喜び「ことができたなら」と願いながら、時を同じくしています。

しかし、まずは相談を受ける支援員が、制度や支援の仕組み、障がいの特性や支援方法まで把握し、豊富な知識を持っていなければ、この制度は単なる調整役と形だけの相談で終わってしまいます。広い見解で支援を組立て、的確にプランニング出来る人材を養成することが急務です。国は制度を作つて終わりではなく、

そのような人材の育成にも力を入れ、きちんとした対価をそこに付けて行かなければ、この制度は「縫にかいだ餅」になってしまいます。

うスクリップアップに努めているようですが、しかし、自事業所での取り組みはあっても、他事業所との連携や、他職種間の情報の共有や合同学習会、支援会議などは行われていないのが現状です。そこで、制度として注目したいのが「相談支援業務」です。厚労省もこの業務の拡充を図っています。

これまで福岡市では、市の委託事業として、各区に一事業所程度の割合で「支援センター」が設置され、支援員が業務を担ってきたのですが、その需要の多さから、少数の支援員では十分に対応しきれていませんでした。そこで国は、相談支援として個別支援計画や事業所間の調整などの業務に給付を付け、相談支援事業を強化しようとしています。

高橋 厚子

娘は脳性マヒ・関節拘縮症
特別支援学校中学部1年生

あくび



娘が大きなあくびをするとホツとします。娘の肺は通常の半分程の大きさで動きがあまりよくなく、アレルギー体質があるので、痰が多く吸引が欠かせません。

あくびが始まると痰が動き、中途半端などころで咳き込んでしまうことが、よくあります。う、もどかしい。なので、大きなあくびが最後まで成功すると、スマートって感じです。娘が大好きな「あくび」という絵本があります。かば→きりん→…→パパ→ママ→最後にボク、と、あくびが伝染していくお話です。娘の一番のお気に入りはパパのページで、「ギャハハ」と笑います。

この絵本は、福岡大学病院小児科病棟のプレイルームに置いてあるみんなの本です。大好きだけど、あえて自宅用には買っていないません。入院したときのお楽しみです。入院は嫌だけど、仕方なく入院したときに、「ジャーン」と言つ

*腸ろう——小腸につながったチューブがお腹から出ており、直接栄養剤を注入しています。

て娘に見せるのがささやかな楽しみです。二年半前に腸ろうの手術をしたときは、術後のつらい時期に、この絵本で一瞬ニヤッと笑つてくれました。そして、退院する頃にはアハアハ笑つて、元気度がわかります。

絵本の中のボクは大あくびの後に眠ります。娘も一日のおわりに大きな気持ちのいいあくびが成功すると、それは体調が良い証しであり、ここからホツとします。

「せつかくいろいろな子どもたちがことばをつかっているのに、しんじて」
1歳になる直前の転落事故で、頭部外傷により四肢体幹機能に重度の障害を負った輝くん。言葉も話せませんでしたが、愛育養護学校でパソコンを使った表現方法に出会い、思いを文字で紡ぎ始めました。16歳で亡くなるまで、強い筋緊張を伴う身体で全身全霊をかけて綴った文章をまとめた本です。

「朝日新聞」(12年10月3日朝刊)で取り上げられた記事が反響を呼び、注文が殺到したそうです。重症心身障害児者の内面から溢れ出でくる「言葉」の深さに驚愕させられます。じっくりと時間をかけ寄り添いながら言葉を紡いでいく大切さを教えられます。



ひかる『輝 いのちの言葉』
白田 輝 著
価格1000円 (2012年刊)
【問合せ先】
愛育養護学校「輝」編集委員会
TEL 03-3473-8319
FAX 03-3473-8474
hikaru@aiiku-gakuen.ac.jp

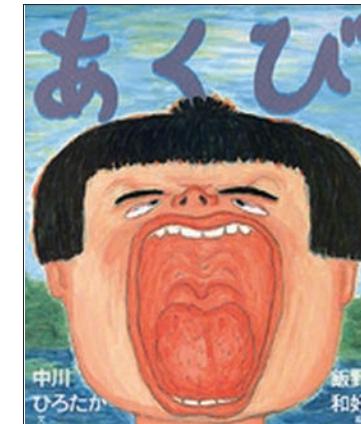


『みんな言葉を持っていた
障害の重い人たちの心の世界』
柴田 保之 著
税込2520円／オクムラ書店
(A5判, 217頁, 2012年刊)

白田輝くんの言葉をつむぎ出す支援をした柴田保之氏(国学院大学人間開発学部初等教育学科教授)の著書。

「これまで障害が重いために、言葉の獲得以前の発達段階にあると考えられたり、簡単な言葉しか発したり理解することができないと考えられていた方が、実際には豊かな言葉の世界を有しているという事実を、広く世の中に訴えるために書いたものであります」(「はじめに」より)

本の紹介



『あくび』
文：中川ひろたか 絵：飯野和好
税込1575円／文溪堂 (1999年刊)